



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報 第5号

編集・発行：東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2007年3月1日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022)795-7556 FAX (022)795-7583 E-MAIL: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会・郵便振替口座番号：02220-5-66621

東北大学創立百周年と国際文化研究科

石幡 直樹

(百周年記念事業部局代表者・言語応用論講座教授)

2007年に東北大学は創立百周年を迎えます。東北大学は、1907年に3番目の国立大学として創設され、研究と教育を切り離せない一体と捉えて、優れた研究にもとづく教育を目指す大学として、さまざまな独創的な研究成果を世に問い、日本のみならず世界の発展に貢献する創造性あふれる人材を社会に送り出してきました。また、いち早く女子学生の入学を認めるなど広く門戸を開放し、国内外から優秀な学生を集めてきました。

百周年記念事業では、これまでの100年の成果を振り返り、次の100年を展望するという視点からさまざまな行事が計画されています。すでに学内には記念の垂れ幕、のぼり、看板などが設置され、市内には記念広告バスが走っています。この機会に学章、スクールカラー、学旗、学歌も正式に制定されます。8月25日(土)、26日(日)には記念祭りが片平キャンパスで開かれ、国際文化研究科を含むすべての部局、研究所、図書館などが出展をして市民との交流を深める予定です。続いて8月27日(月)には国内外から多数の来賓を招いて記念式典が挙行されます。この他にも講演会、フォーラム、コンサート、記念展示(江戸東京博物館、仙台市博物館、仙台文学館)など多数の行事が予定されています。

その中のひとつに「東北大学ホームカミングデー」があります。これは、卒業生が毎年決まった期日に仙台を訪れ、同窓会や同級会、あるいはさまざまなイベント等に参加することにより、恩師や同窓生、あるいは現役の教職員、学生と親睦・交流を深め、本学への理解と関心、さらには誇りを高めていただくことを目的に、100周年に当たる2007年度から実施されるものです。本学が次の100年に更なる飛躍を期すために、教職員、学生、そして卒業生のより緊密な連携協力が必要との認識から、同窓会の活動を全学的に活性化して、卒業生との連帯感を深めていくことを目指しています。

ホームカミングデーには毎年「体育の日」直前の2日間をあて、この期間に学内や仙台市内の施設で、部局、学友会及び同窓会等との連携のもとに実行委員会でプログラムを作成し、全学的な行事と国際文化研究科などそれぞれの部局の行事が開催されます。まず、10月6日(土)には、「100周年記念仙台セミナー」「東北大学全学同窓会総会」「東北大学全学同窓会懇親会」が予定されています。詳しくは決定次第皆様にお知らせいたします。これらの行事では、ホームカミングデーふさわしい新しい全学同窓会を設立し、同時にそれを祝い懇親を深めることとなります。

続く10月7日(日)午後には国際文化研究科を含む人文系6部局が参加する「創立百周年記念国際シンポジウム『女性百年—教育・結婚・職業』《いかに生きたか、いかに生きるか》」が川内キャンパスで開催されます。東北大学は日本の帝国大学で初めて女性を受け入れた歴史を持ち、今年度からは理系の女性研究者の育成と援助を目指して、科学技術振興調整費による「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」に着手しました。このシンポジウムは、本学における「男女共同参画社会」の歴史と展望を特に人文学研究者の立場から考えようとするものです。

その他に、巡回バスで大学の幾つかの施設を同窓生に公開する「大学訪問ツアー」、企業に就職している卒業生が、ブースを設けて在学生に就職アドバイスをを行う「先輩の就職相談」、卒業生が在職する企業の企業紹介パネルを展示し、地元企業や卒業生・在学生に紹介する「卒業生企業の紹介と展示」などの実施も検討中です。

国際文化研究科同窓会では、10月7日(日)百周年記念国際シンポジウム終了後の夕刻に、同窓会として初めての懇親会を国際文化研究科会議室で開催する予定です。詳しくは後日、発行予定のメールマガジンでお知らせしますが、この機会にぜひシンポジウムや懇親会に参加され、なつかしい研究室を再訪されてはいかがでしょうか。また在学中の皆さんも同窓会会員として、先輩方の貴重なお話を伺うよい機会ですので、奮ってご参加下さい。

第6回同窓会総会と講演会の案内

第6回同窓会総会と同窓生による講演会を次の通り開催します。講演会・総会に引き続き、国際文化研究科との共催により平成18年度修了祝賀会が開催されますので奮ってご参加ください。

**お誘いあわせて
多数ご来聴ください！**

日時：2007年3月27日（火）14：20～

研究科学位記伝達式に引き続き（会員各位は14:20～の学位記伝達式からご臨席下さい。）

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：熊本 早苗 氏

（岩手県立大学短期大学部講師・アメリカ研究講座出身）

演題：「自他の文化理解を柱とした国際文化教育
―盛岡短大部の場合―」（仮題）

第5回同窓会総会と講演会の報告

第5回同窓会総会を2006年3月24日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにおいて開催しました。総会に引き続き、山田恵氏による講演会を開催しました。

同窓会講演会要旨

「国際文化と国際教養」

山 田 恵

（仙台白百合女子大学・アメリカ研究講座出身）

私と国際文化研究科との関わりは13年前の国際文化研究科の設立の年に入学したときに始まります。当時の研究科の様子を振り返ってみて、現在と大きく異なる点は、今より講座間の交流が盛んだったことでした。そのため、当時は全く異なる専攻の方たちから自分の研究に関する質問を受ける機会も多くありました。私の場合は、発表会のたびごと、「なぜ文学を研究対象とするのか」という質問を受けたことを覚えています。このような質問は、文学研究科ではまずありえない質問でしょう。しかし、当時の国際文化研究科では、「文学研究科と同じような文学研究は、国際文化研究科にはふさわしくない」という考えがかなり共有されていたのです。私に限らず、設立当初にいた学生は、いやおうなしに「国際文化研究とは何か」とか、「学際的・総合的」研究とは何かといった問題を常に意識させられていました。

私は4年前から仙台白百合女子大学に勤務しておりますが、私が所属する国際教養学科も、国際文化研究科と同様に既存の

研究科や学科との違いを示さなければならないという共通の課題を背負っていました。つまり、「国際文化とは何か」をいう問題を常に考えなければならない国際文化研究科と同様に、「国際教養とは何か」という問題を常に意識しなければならない状況にあったのです。もちろん、白百合の国際教養学科も、何のモデルもなしに作られたわけではなく、名前の「教養」という名称が示しているように、アメリカのリベラルアーツ・カレッジを模範にして設立されたと聞いております。しかし、具体的にどのようなカリキュラムを特徴として、どのように既存の文学部英文科といった学科と違うのか、誰もが納得するようなはっきりとしたヴィジョンを示すことには必ずしも成功していたわけではなかったと思います。

国際教養学科の呼び物のひとつに、長期留学の斡旋と短期海外研修があります。長期留学は、アメリカのカンザス州にあるベネディクション・カレッジという、カトリックの名門校と提携しています。また、これとは別に、毎年、短期の語学研修も実施しており、昨年、一昨年はカリフォルニア大学で研修を行い、来年度は、オーストラリアのブリスベンにあるカトリック系の大学での研修を予定しております。このような企画に加え、新年度からは国際文化コースと国際ビジネスコースという二つのコースを設定して学生の多様な要望にこたえようとしています。「国際教養」という言葉が認知されてきたことに加え、このような努力が効を奏してか、本学科の志願者は、18歳人口が減少しているにもかかわらず増加の傾向にあり、来年度入学者はこれまでで最高を予定しています。関係者の一人としては嬉しいかぎりですが、この傾向が今後も続くかどうかはわかりません。新しい組織にいるものの宿命として、今後も教員が一丸となって、魅力的な学科にするにはどうしたらよいかを考え続け、改善の努力をしていかなければならないと考えております。

ご存知のように、この国際文化研究科でも、5年前に第三専攻が加わり、「地域研究」「地域間の相互交流」に加え、「言語」という三つの領域を、学際的・総合的に研究することを目的とする形に再編されてきました。しかし、設立当初を知る者としては、当時と比較して、「学際的・総合的」研究がどれだけ推奨され、進められているのかという点においては、残念ながら決して十分とはいえないのではないかという気がしてなりません。学際的・総合的研究の重要性は、私たち国際文化研究科に関係した者たちが、意識的にそういった研究の重要性をアピールしながら、それぞれの研究を着実になしとげていかない限り、なかなか認められるようにはならないと思います。ですから、微力ながら、私も、今後も自分の研究を進めながら国際文化が認知されるためのお手伝いができればと思っておりますし、何より、本日修了される皆さんが、この大学院で培った知識や経験を基に、それぞれの道で活躍されることで成し遂げて行ってくれることを大いに願う次第です。

新着情報！

公開国際交流プログラムの報告

小林 文生

(国際交流委員会委員長・ヨーロッパ文化論講座教授)

平成 18 年度は、国際文化研究科主催行事「公開国際交流プログラム」として 4 回の講演会等を、国際交流委員会の担当で一般公開で実施しました。以下に、簡単に概要をご紹介します。

フランス文化講演会 平成 18 年 6 月 12 日 (月) 午後 4 時 30 分より、マルチメディア教育研究棟 6 階大ホールにて、在日フランス大使館文化参事官のジャン＝ルイ・ムキエリ氏を講師に招いて、「日仏文化交流- その経済的側面- 」という演題でお話をうかがいました。ムキエリ氏は、パリ第一大学の経済学の教授でもあり、この日の講演は、ご専門の国際経済の理論をふまえながら、文化交流のあり方に焦点を当てたもので、具体的には、文化交流とサービスの交流を比較しながら議論が展開されました。聴衆は約 80 名で、講演会に引き続き、同じ場所で机を口の字に並べ替えて懇談会を催し、知的興奮を伴いながらも和気霽々とした集まりとなりました。



ジャン＝ルイ・ムキエリ氏

韓国伝統音楽公演 平成 18 年 7 月 29 日 (土) 午後 1 時より、マルチメディア教育研究棟 206 号室にて、「韓国風流との出会い- コムンゴ (玄琴) とヘグム (奚琴) の調べ- 」と題して、韓国国立芸術総合学校伝統芸術院教授の金永宰氏と同院 3 年生の金龍河氏による演奏会を行いました。これは、「東北大学若手研究者萌芽研究育成プログラム」の研究代表者である国際文化研究科の劉庭秀助教授が、研究チームの活動の一環として主宰したものです。韓流が大衆文化に偏りがちな今、改めて韓国伝統文化に接する機会として、たいへん貴重なひとときとなり、150 名を超える来場者も感動の渦に包まれ、質疑応答も活発なものとなりました。



金 泳宰先生



ヨーロッパ文化講演会 平成 18 年 10 月 18 日 (水) 午後 4 時 30 分より、マルチメディア教育研究棟 6 階大ホールにて、フランスの国際教育学研究センター (C. I. E. P.) 所長のアルベール・プレヴォ氏をフランスからお招きし、「EU における言語教育の現在」という演題でお話ししていただきました。近年の EU における言語教育のあり方が大きく変化している事情とその背景を、現在のフランスの言語政策の現場を統括する最高責任者の立場から、最新の話題を交えて紹介していただきました。聴衆は約 70 名で、講演に引き続いて開いた懇談会も活発な話し合いとなり、参加者全員が、言葉という共通の問題をめぐる議論を通じて、それぞれに自分自身のことを考える有意義なひとときとなりました。



アルベール・プレヴォ氏

日中韓学術交流フォーラム 平成 19 年 2 月 3 日 (土) 午後 1 時 30 分より、マルチメディア教育研究棟 206 号室にて、「東アジアにおける日本研究- 言語・文学・思想- 」と題して、韓国と中国からお招きした 3 人の先生方のお話をうかがいました。講演は、韓国・中央大学の任榮哲教授による「韓国人とのコミュニケーション」、韓国・漢陽大学の尹相仁教授による「韓国人と近現代文学- 夏目漱石と村上春樹の場合-」、中国社会科学院の龔穎副研究員による「なぜ今の中国は「江戸儒学」か」の順に行われ、異文化間コミュニケーションの難しさ、現在の東アジアにおける文化状況、中国における日本思想史研究の意義などが、講演者自身の体験をまじえて達者な日本語で論じられ、160 名を超える聴衆は熱心に聴き入っていました。



任 榮哲先生



尹 相仁先生



龔 穎先生

新着情報 II

第 13 回国際文化基礎講座の報告

第 13 回国際文化基礎講座では「生き様の研究」と題し、本研究科の 3 教員が、「ハムレット」「アラビアのロレンス」「第二次大戦従軍兵士の日記」をテーマに日頃の研究の一端を公開されました。

(1) シェイクスピアの悲劇『ハムレット』 —主人公の死の形をめぐる—

市川 真理子

(言語応用論講座教授)

ウィリアム・シェイクスピア (1564—1616) の四大悲劇の一つである『ハムレット』(1601) を取り上げて、主人公ハムレットの死の形をめぐるいくつかの問題についてお話しいたしました。

シェイクスピアの悲劇は主人公の死で終わります。主人公は、その死によって自らが属する共同体の秩序や平和を回復したり、あるいはその破滅によって人間の受け入れるべき生の条件や真実を証明します。だから、その死は、そしてそれにいたる生は、決して無駄ではなく、価値あるもの、英雄的なものなのです。それこそが悲劇が観客に伝える重要なメッセージであり、そうした意味で、悲劇とは、主人公の生の意義を讃えるものである、といっても過言ではありません。

ところで、『ハムレット』の初期印刷本は三種類存在します。興味深いことに、それらのテキストではハムレットの死の形、そして彼の死に対する舞台上の人物たちの哀悼の表し方が異なっています。まず、「後は沈黙」という最後のせりふを語った後、第一・四つ折り本(1603)および第二・四つ折り本(1604—5)では、ハムレットは絶命して文字どおり沈黙するのですが、第一・二つ折り本(1623)では、彼は呻き声をあげ、その後に絶命します。また、第二・四つ折り本では、舞台上に横たわる 4 人の遺体すべてが搬出されるのに対して、第一・四つ折り本と第一・二つ折り本では、ハムレットの遺体だけが王者を弔うのにふさわしい形で運び出されます。上述のように、悲劇終幕において、主人公の死を悼み弔うことは、主人公の生自体の意義を確認することに他なりませんから、この相違は非常に重要です。シェイクスピアは劇作品を、彼の所属する劇団が彼らの劇場で上演するために書きました。上演には、舞台の構造や出演する俳優の数など、諸々の物理的な条件が影響を及ぼします。1601 年に、ロンドンのグローブ座において、ハムレットの死とそれに対する哀悼はどのように演じられ、結果的に観客たちはどのような観劇経験をしたのでしょうか。テキスト研究や、当時の劇団や劇場に関する研究などの成果を紹介しながら、『ハムレット』終幕の形を再現するという試みを行いました。

(2) アラビアのロレンス

大河原 知樹

(イスラム圏研究講座助教授)

「アラビアのロレンス」こと、イギリス人トマス・エドワード・ロレンスの「生きざま」を一言で要約することは難しい。50 年に満たないロレンスの人生は、(1)幼年・少年・青年期(1888—1908)、(2)考古学者(1909—14)、(3)情報将校(1914—18)、(4)外務省・植民地省勤務(1919—22)、(5)空軍・陸軍勤務(1922—35)、(6)除隊後(1935)に分けられ、それぞれの活動のほか、執筆活動や翻訳も行なっている。

非常に多彩な活動で知られるロレンスを講義でとりあげるにあたって、(1)ロレンスの名を有名にしたアラブの反乱だけに焦点をあてないこと、(2)ロレンスをイギリスやアラブにとつての「英雄」または「裏切り者」と決め付けないこと、したがって(3)できるだけ多角的に検討すること、を基本方針とした。

具体的には、「時代に乗ったのか、それとも翻弄されたのか?」という節をもうけ、19 世紀以降の東方問題、第一次世界大戦などの時代背景を解説した。また、「人々との『出会い』と『別れ』」の節では、ロレンスが人生において影響を受けた人物、例えばオクスフォード大の考古学者にして英諜報機関の大立者ホウガース博士、中東専門家兼旅行家、「イラクの無冠の女王」と異名をとるガートルード・ベル、アレンビー将軍、メッカの名門ハーシム家のファイサル、アメリカ人ジャーナリストのトマス、政治家チャーチルとの関わりをじっくり見ていった。そして『「マニア人間」ロレンス』の節では、ロレンスの読書、文章、研究、冒険、軍事、機械、発明、スピード分野におけるマニアぶりを検討し、「ロレンスの謎:『神話』と『現実』」の節では、第一次世界大戦のアラブ反乱、中東戦線、中東戦後構想にまつわるロレンスの謎について、最新の研究成果や資料も用いしつつ検討してみた。

以上のように盛りだくさんの内容に手を広げた結果、講義担当者は最終的な評価を避け、受講者自身にロレンスの「生きざま」を判断していただくという趣向と相成った。よく言えば「生徒に考えさせる」、悪く言えば「他人に下駄を預ける」講義となってしまったことは反省の材料である。実際に、それほどロレンスという人物の「生きざま」が複雑怪奇であったとも言えようが、受講者からは「ロレンスの『生きざま』を講義の最初に一言で示し、その上でそれに至った根拠を提示して欲しい」という要望もお寄せいただいた。

学生とはまた一味ちがう、社会人や教師の受講者相手に講義をする形式は初めてであり、いろいろとまどいもあったが、何とか無事に講義を終えることができたのも、委員会の先生にくわえて、勝山先生など研究科の諸先生方のアドバイス、また

教務係のご支援のお陰だと感謝している。関係者の皆様に再度御礼申し上げます。

(3) 第二次大戦従軍海軍兵士の日記より

加藤 弘

(言語文化交流論講座助教授)

第二次大戦に従軍した海軍兵士が残した日記より、軍隊生活の実態と生活感情を紹介した。

平時には、兵営内、艦内で繰り返される日課、訓練を記録し、休日に外出して親類を訪問したり、下宿先の家族と交流したり、街で映画を見たり、料理屋で戦友と酒を酌み交わしたりした様子などを書き記している。

いっぽう日華事変(1937)では、上海の前線にあってあわや戦死という緊張の体験を書き残している。

開戦(1941.12.8)にあつては、戦闘の場から遠い南洋パラオ島にあって、大本営発表に接して、兵士らしい興奮と覚悟を書き残している。

新着情報 III

国際文化研究科の21世紀COEプログラム 「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」活動報告(5)

堀江 薫

(東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」リーダー・異文化間教育論講座教授)

本COE拠点の活動もいよいよこの3月末で一つの区切りを迎えることになりました。「言語・脳・認知総合科学」という新しい融合的学問分野で世界水準の言語研究を展開できる博士課程学生、ポスドクが本拠点から育ていったことは私たちにとって何よりも嬉しいことでした。おりしもこの3月には、本研究科に入学した後、本拠点メンバーである川島隆太加齢医学研究所教授との共同研究指導体制のもとで研鑽を積み、同分野でインパクトの大きい国際学術誌に論文を出版してきた2名の博士課程学生が卒業します。本COE拠点は、国際文化研究科が主体とはなっていますが、むしろ、加齢医学研究所、情報科学研究科、医学系研究科、文学研究科、工学研究科、未来科学技術共同研究センターといった学内組織の研究者のダイナミックな「研究教育力」を引き込めたことが最大の収穫であったと思います。来る2月28日に「研究成果報告会(兼外部評価会)」を川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟6階ホールにおいて開催いたしますが、本拠点の5年間の研究教育活動の締め

くくりにふさわしい機会にしたいと考えております。

個人的な感想になりますが、研究の分野が違うと、研究者養成の仕方、共同研究のあり方を含めたカルチャーが大きく異なることをこの5年間で強く感じました。端的に言うと、人文科学分野の若手研究者、特に研究者になることを目指している博士課程学生への研究指導のあり方は、根本的な見直しの時期に来ていることを、この5年間に他の研究分野の事業推進担当者と交流する中で感じさせられました。他の分野に比べた場合に人文科学分野の博士学位授与率が著しく低いことは大きな問題となっております(以下の図を参照)。自然科学の研究室(laboratory)体制を人文科学分野に導入するのが一概に是とは言えませんが、単なる語学訓練や論文作法などの技術論を超えた新たな人文科学研究者養成のシステムを人文科学研究者が立ち上げ、自ら研究の最先端に立って学生に手本を示すか、異分野の研究者と共同でそのようなシステムを構築しない限り、人文科学という学問分野、および当研究科を含めた人文科学系大学院の将来は非常に厳しいと思わざるを得ません。

そのような点で、本COE拠点の5年間の研究教育活動を通じて、言語科学(人文科学)の研究者が脳科学、認知科学等の他分野の研究者とともに博士課程学生の研究教育指導に当たることの重要性、有効性が実証できたと考えております。また、このような研究教育体制は、COE終了後も「国際高等研究教育院」(18年4月発足)、「融合領域研究所」(19年4月発足)、「本研究科付属言語認知総合科学研究センター」(19年4月発足)といった学内の組織に引き継がれます。今後とも本COEおよびその後継組織の研究教育体制にご支援をいただければと思います。



朝日新聞ウェブ版記事「文系の博士号、難しすぎ? 理系の3分の1以下」

(2007年2月12日)

就職活動報告会

国際文化研究科では、これから就職活動を始められる学生の皆さんに参考にしていただくため「就職活動報告会」を開催し、本研究科修士ならびに今年度、就職を内定された院生諸君に実体験に基づく就職活動のノウハウを語っていただきました。

(1) 「大学職員」になるには

板垣 安之

(比較文化論講座前期課程修了生)

私は東北大学国際文化研究科を平成17年3月に修了し、現在大学職員として、宮城教育大学の財務課に勤務しています。「大学職員」といっても学生時代は事務室の窓口で業務を垣間見るくらいで、実際どのような仕事をしているのかはわかりませんでした。私が現在所属している財務課というところは大学のお金を管理している部署で、大学の物品を購入したり、研究費などの予算の管理をしたりしています。財務課のほかにも、学生のサポートをする学務課、大学内の施設を管理する施設課などがあり、「大学職員」とは「研究」ではなく「経営」という面から大学に関わっていく仕事だと言えると思います。

さて、大学職員になるには国立大学法人等職員採用試験を受けなければなりません。この試験は国家公務員採用試験や、地方公務員採用試験等と同種のもので、併願する場合は試験日程に注意が必要です。試験勉強を開始する時期については、早ければ早いほどよいというのが率直な感想です。出題範囲が広く、経済学、法学、政治学等専門試験、その他一般教養試験もあるため、学部2年次から勉強をはじめ丸2年間公務員試験の勉強をする人も珍しくはないようです。特に、大学院生にとっては、大学院での研究と平行して勉強するのは少し負担が大きいかもしれません。各種の公務員試験は総じて5月から7月にかけて行われるのですが私が公務員試験の勉強を始めたのは少し遅く、大学院1年の2月ごろでした。民間企業も視野に入れて就職活動をしていたので、それまで全く手をつけていなかったわけではないのですが、本格的に試験勉強にとりかかることができませんでした。

そのため、自分が民間企業志望か、公務員志望かを早い段階で決定する必要があると思います。公務員志望であれば、大学院1年次の秋ごろには公務員試験に絞って勉強を始めたほうがよいと思います。民間か、公務員かどちらかに絞ることは不安に思うかもしれませんが、しかし、どちらとも中途半端になるよりはよいと思います。公務員に絞るといっても様々な試験があり、それぞれ併願できるように日程が組まれています。試験内容も一部特殊なものを除いて、共通していますから、複数の試験に対応することは可能です。研究と試験勉強の両立は簡単ではありませんが、チャレンジする価値は十分あると思います。

最後に「大学職員」という仕事について。「大学職員」も教員や学生とは違った形ですが、「大学」を形成する一員です。「大学」に関わる仕事をしてみたい方は進路の選択肢に「大学職員」を加えてみてください。

(2) 「エントリーシート」と「面接」

草薙 梓

(多元言語文化社会論講座前期課程)

就職活動に関する一般的な流れに関しては、情報サイトや就職情報誌などで詳しく述べられていますので、ここでは私の就職活動における数多くの失敗と内定までの過程を報告したいと思います。

私が本格的に企業への就職を考え始めたのは修士1年の1月中旬頃からです。この時期はまだ多くの企業が説明会を行っていたので、活動開始時期としては遅くもなく早くもない時期だったのだと思います。しかしながら、この時期は研究や授業で忙しい時期でしたので中々就職セミナーなどには参加できず、就職活動の全体像をほとんど掴めないままスタートしたことを記憶しています。そのため、当初はエントリーシート（以下ES）の書き方もわからず、面接対策も不十分でした。特に印象に残っている失敗例としては、ESの中で「学生時代の取り組み」を書く際に、志望する企業に合わせてその内容を変えてしまっていたことです。面接の回数が少ない時期はそれでも対処できたのですが、2月から4月にかけて面接が重なるようになると、それぞれの企業に異なる内容のものを送ってしまったことで、ESで提出した内容と面接で話す内容に食い違いが生じることもありました。また活動初期の段階では、面接でも話す内容に一貫性がなかったことが原因で面接官と十分にコミュニケーションが取れなかったように思います。

こうした失敗の原因は「自己分析」（自分の経験や能力を再確認する作業）の甘さにありました。自己分析の手法は人によって様々だと思いますが、私の場合は、高校生くらいから現在に至るまでのライフ・ヒストリーを3ページ程度にまとめるという手法を活用してみました。もちろん自分の体験や行動の全てを書き記すのは無理がありますので、特に印象深かった体験を抽出して、その時に自分がなぜそのような行動を取ったのか、その行動に対する周りの反応はどのようなものであったのか、そしてそこから自分が得たものは何か、などの問題を自問しながら書きました。中でも学生時代に取り組んだことは、なるべく一つに絞り、その取り組みにおける問題点や評価はなるべく具体的に書き残すようにしました。その結果、過去の自分の行動とその動機、そして今後自分が取り組みたい仕事を再確認すると同時に、就職活動終盤では面接の質問においても一貫性を

持って対処できるようになりました。

先にも申し上げた通り、自己分析の手法は人によって異なると思いますが、企業のESや面接の質問において、一貫性は重要な要素であると考えられます。そして、この一貫性を獲得するためには、自己分析は不可欠な作業になると思います。最後に、大学院生の就職活動は研究や授業と並行して行わなければならないため、忙しく辛い時期もあるかもしれませんが、あきらめずプラス思考で頑張ってください。皆様のご健闘を心よりお祈りします。

(3) 常に前向きな姿勢で

崔 明華

(多元言語文化社会論講座前期課程)

就職活動を始めたのは3月で、内定をもらったのは6月中旬のことでした。業種はアパレル関係で、大学院終了後の4月に入社することになります。就職活動の体験から感じた日本企業の特徴、および留学生としての就職活動における注意点などについて紹介したいと思います。

「人格重視」：中国の就職活動においては、大学時代の専攻と専門的な知識が問われたのに対して、日本の就職活動においては学部・学科・専攻に関しては問われない場合が多い。また、エントリーシートや面接でも「大学で頑張ってきたこと」や「あなたの価値観を教えてください」といった質問をされることが多く、専門的な知識より、むしろお見合いのように性格と人間性が重視されているように思いました。そのため、質問に対しては、具体的にわかりやすく答えるだけでなく、自分の性格も理解してもらえるように心がけました。例えば、「私は責任感がある」といった抽象的な表現をできるだけ避けて、そうした性格を導くことのできるようなエピソードを紹介しました。

「志望動機を明確に」：志望動機、つまり、なぜ、この企業にこだわるのかという質問ですが、ある企業の面接で、うまく答えられなかったために落とされてしまったことがありました。志望動機をしっかりと答えられるようにするためには、企業研究と業界分析は絶対欠かせないものであることを実感しました。それからは企業のホームページ、企業説明会、就職サイトなど様々な情報を参考にしながら、志望動機をまとめ、面接に臨むようにしました。

「日本語よりアイディアで勝負」：最初は、日本語を正確に話せない、書けないから駄目だろうかとという心配がありました。しかし、いくつかの企業の面接を経験し、流暢な日本語を話せることよりもむしろ外国人としての視点、経験、また、日本人学生とは異なる考え方が求められているのではと感じるようになりました。留学生としての利点を活かして、異なる考え

や経験を恐れずに主張したことが良かったと思います。

「常に前向きに」：就職活動は、日本人学生にとっても困難を伴うものなので、たとえ落とされたとしても、自信を失くさずに、常に前向きの姿勢を保つことがとても大切だと思いました。企業に一方向的に選ばれているのではなく、同時に、自分たちも企業を選んでいることを念頭に置いておくの良いのかもしれない。

就職活動には近道やノウハウではなく、自らの失敗の体験を通じて、原因を追究し、ミスを克服していくことができれば、そのうちに自分に合った企業が現れると思います。

事務局からの連絡

①メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科に係る連絡のみに使用します。
国際文化研究科教務係 <int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp>

②メールマガジン発行について

事務局では現在メールマガジンの発行を準備中です。後日、皆様からお届けいただいているメールアドレス宛にメールマガジン発行のためのお知らせを送らせていただきますのでご了承くださいようお願いいたします。

③会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○平成18年4月入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：4,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：6,000円

○上記以外の方（修了生、在学生、現教職員・元教職員等）にはご寄付という形でご支援をお願いできますと幸いです。

会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご直接お納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621

④ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら、事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたら、異動通知連絡カード等によりご連絡願います。お寄せいただいた個人情報厳密に管理し、同窓会・研究科に係る連絡のみに使用します。

「東北大学大学院国際文化研究科同窓会」会則

(平成14年11月29日制定)

(名称)

第1条 本会は、東北大学大学院国際文化研究科(以下「国際文化研究科」という。)同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の親睦を図り、国際文化研究科の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 会員名簿及び会報の発行
- (2) 講演会・シンポジウム・談話会等の開催
- (3) その他、必要と認められる事業

(事務局)

第4条 本会の事務局は東北大学大学院国際文化研究科内に置く。

(会員)

第5条 本会の会員は、正会員、学生会員及び特別会員とする。

- 2 正会員は、次のいずれかに該当する者とする。
 - (1) 国際文化研究科前期課程修了者
 - (2) 国際文化研究科後期課程修了者
 - (3) 前号に準ずる者
- 3 学生会員は、国際文化研究科に大学院生として在籍している者とする。
なお、修了したときは正会員となるものとする。
- 4 特別会員は、次のいずれかに該当する者とする。
 - (1) 国際文化研究科の専任教員及び元教員
 - (2) 前項以外の者で、理事会の推薦により総会の承認を得た者

(役員及びその任務)

第6条 本会に、会長1名、副会長2名、理事若干名及び監事2名を置く。

- 2 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- 4 理事は、理事会に属する事項を処理し、会員の代表として本会の運営にあたる。
- 5 監事は、本会の会計を監査する。

(役員の選出)

第7条 会長は、東北大学大学院国際文化研究科長に委嘱する。

- 2 副会長は、正会員のうちから、会長が委嘱する。
- 3 理事は、会員のうちから、会長が委嘱する。
- 4 監事は、会員のうちから、会長が委嘱する。

(役員の任期)

第8条 副会長、理事及び監事の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。

- 2 補欠により選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 役員は、その任期が満了したときであっても、後任者が選任されるまでの間は、その任務に留まるものとする。

(総会)

第9条 通常総会は、毎年1回、会長が召集し、本会の運営に関する重要事項を審議する。

- 2 会長または理事会が必要と認めたときは、臨時総会を開くことができる。
- 3 総会の議決は、出席者の過半数をもって決める。

(理事会)

第10条 理事会は、会長、副会長及び理事をもって構成し、会務の執行に関する必要事項を審議する。

(運営経費)

第11条 本会の運営経費は、入会金、会費、寄付金及びその他の収入をもって充てる。

- 2 特別な行事を開催するとき、または臨時に費用を必要とするときは、その都度理事会の議を経て臨時会費を徴収することができる。

(入会金及び会費)

第12条 学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。

- 2 入会金は 2,000 円とし、初めて学生会員となったとき1回に限り納入する。
- 3 会費は、次のとおりとする。
 - (1) 国際文化研究科前期課程の学生 4,000 円
 - (2) 国際文化研究科後期課程の学生 6,000 円

(会計年度)

第13条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(支部)

第14条 会員が必要と認めたときは、支部を設けることができる。

- 2 支部に関する規約等は、当該支部で定め、速やかに理事会に届け出るものとする。

(会則の改正)

第15条 この会則の改正については、当分の間、理事会の承認を得て施行できるものとする。

- 2 前項の場合にあつては、改正後最初に開催される総会に報告し、承認を得なければならない。

(雑則)

第16条 この会則に定めるものの他、同窓会の運営に必要な事項は、理事会において定めることができる。

(付則)

- 1 本会則は平成14年11月29日より施行する。
- 2 平成14年度以前に入学または進学した学生会員の入会金は免除するものとし、残りの修学年数1年あたり 2,000 円の割で計算した額の会費を納めるものとする。